

法然教団の諸系譜

野村 恒道

1 これまでの主な研究

法然を発祥とする教団組織の、師弟相承を図式化などして表した、いわゆる法然教団の系譜類について、近代における主な論究を辿ると、以下のようなことである。

先ず戦前においては、山上正尊「浄土系譜に顕われたる親鸞聖人」（『仏教研究』四—一（一九二三・三））が、この種の系譜を扱った論文の先鞭をつけ、鵜飼光順「奈良念仏寺藏浄土系譜考—東暉上人小傳—」（『摩訶衍』一九（一九三九・七））では奈良念仏寺に所蔵される『浄土系譜』（仮名）の翻刻を史料として掲載紹介して、この系譜と他の諸系譜との関連について述べている。

戦後になると、細川行信「源空門下の分流—その系譜資料について—」（『印度学仏教学研究』一一—一（一九六三・二））によって、網羅的に、『浄土伝燈総系譜』、『浄源脈譜』、『浄土血脈論』、『浄統略讃』、『浄土真宗鎮西正統略系図』、『浄土宗派承継譜』、『法水分流記』、『浄土源流図』、『蓮門宗派』、『宗派流伝』、『浄土系譜』の十一種の系

譜が挙げられ、この内特に『法水分流記』、『蓮門宗派』、『宗派流伝』の三種について検討されている。

次に、野村恒道・福田行慈・中野正明「日本浄土教諸系譜について」(『仏教論叢』二六(一九八二・九)においては、特に『蓮門宗派』の一部の原型である「浄土惣系図」(西谷本)や、その鎮西名越版である「浄土惣系図」(名越本)の存在を紹介し、細川の挙げた十一種には、『浄源脈譜』を除き、『白旗総系図』、『浄土源流解蒙』を加えて伝存状況などを究明している。そしてそれに続き、野村恒道・福田行慈・中野正明「日本浄土教諸系譜の研究——法然門下系譜の脈流考——」(『仏教文化研究』三〇(一九八五・三))では、前掲の記載で解説した系譜類の特徴とその関連性を明らかにし、最後にそのそれぞれの関係を視覚的に表す図式化を試みている。

同じ頃、牧哲義「堯惠勸録『吉水法流記』について」(『印度学仏教学研究』三三—二(一九八四・三))によって、『法水分流記』の原本的な要素を有する『吉水法流記』という新出の系譜の存在が紹介されたが、それは『法水分流記』と合冊にされたものであった。そして、『法水分流記』の記載内容については、中野正明『『法水分流記』における若干の問題点』(『印度学仏教学研究』三三—一(一九八四・二))が編者静見について取り上げ、それに対し、牧哲義『『法水分流記』に於ける西山義の記述について』(『印度学仏教学研究』三四—二(一九八六・三))で所見が述べられている。

これらに続き、牧哲義「法然門下の相承について(二)——『吉水法流記』付録の血脈相承の考察——」(『印度学仏教学研究』三八—二(一九九〇・三))で、『吉水法流記』の記載に検討を加え、牧哲義「法然門下の相承について(二)——聖岡と堯惠——」(『印度学仏教学研究』四一—一(一九九二・二))では、『吉水法流記』と聖岡の『浄土真宗付法伝』との対比を基として検討している。そして更に、牧哲義『『吉水法流記』『法水分流記』の翻刻とその研究』(『東洋学研究』三〇(一九九三・三))によって、初めて『吉水法流記』の翻刻の全文が紹介されるに至った。

それを第一部資料編として、第二部研究編である牧哲義「法然門下の初期の系譜資料―『吉水法流記』と『法水分流記』について―」（『東洋学研究』三一（一九九四・三））において、『吉水法流記』と『法水分流記』の記載の違いについて論究されている。また、牧哲義「法然教団周辺の人々―『法水分流記』成立の背景をたずねて―」（『東洋学研究』三四（一九九七・三））においても『吉水法流記』と『法水分流記』の記載に注目して論を進めている。

この後、野村恒道・福田行慈『法然教団系譜選』（二〇〇四・九）が出版され、『浄土惣系図』（西谷本）と（名越本）が活字で初めて翻刻され、『法水分流記』、『蓮門宗派』と合わせての四本が、解説と索引を伴い利用に簡便となった。

2 主な諸系譜の概要と関連性

法然教団の師弟関係を、系図の様に図式化して表すようになる前に、それらを記述したものを挙げると、まず住信の『私聚百因縁集』（一二五七）、次に日蓮の『二代五時図』（一二六〇～一二八〇頃カ）、そして凝然の『浄土法門源流章』（一二二一）の三編がある。ここでは、法然の直弟子達をそれぞれ、五流、六流、七流としているが、それ以降の弟子の流れには触れていない。そうしたことで、系譜として整う以前のものとは位置づけられる。そして、それ以降に編纂されたいわゆる系譜類としては以下のようなものになる。

(一) 『吉水法流記』

○編者 堯恵

○成立 永和元年(一三七五)

○写本 永正七年(一五一〇) 康翁が書写し、それを延宝七年(一六七九) 霄翁が書写した奥村玄祐師所蔵本。

○活字本 牧哲義『吉水法流記』『法水分流記』の翻刻とその研究(『東洋学研究』三〇(一九九三・三三)に翻刻掲載。

※ 本系譜は牧哲義「堯恵勘録『吉水法流記』について」(『印度学仏教学研究』三三・二(一九八四・三))によって初めて紹介された。現存するものは写本であるが、『法水分流記』と合冊にされ、題名の「法水分流記 吉水法流記 完」が二行に書かれ、前半に『法水分流記』二七丁、後半に『吉水法流記』一三丁半、そして、奥書の後に「血脈相承図」三編四丁半が付随されたもので、明らかに(二)『法水分流記』の原本的要素がみられ、系譜類の嚆矢とされるものである。

堯恵は深草義で、これは西山派の特に深草義を中心の系譜。ここでは、白川義信空、西山証空、鎮西義聖光、長楽寺義隆寛、一念義辛西、九品寺義長西の六流をあげている。

(二) 『法水分流記』

○編者 静見

○成立 永和四年(一三七八)

○写本 永正七年(一五一〇) 康翁が書写し、それを延宝七年(一六七九) 霄翁が書写した奥村玄祐師所蔵本。

龍谷大学蔵本（二本）、大谷大学蔵本（二本）、東京大学史料編纂所蔵本（大谷大学蔵本影写）

○活字本 『戊午叢書』一（一九一八）、『日本仏教史』一・二（一九五七）、『補訂概説浄土宗史』（一九七八）、牧哲

義『吉水法流記』『法水分流記』の翻刻とその研究』（『東洋学研究』三〇（一九九三・三）に翻刻。『真宗史料集成』（二〇〇三）、『法然教団系譜選』（二〇〇四・九）

※ 本系譜の写本の中、大谷大学蔵本の一本は、その奥書によれば、永正七年（一五二〇）十一月廿八日康翁、大永七年（一五二七）八月廿七日伝空賢智の写しを経た元禄九年（一六九六）一月十八日匪空の写本が、同十三年洛北十念寺十八世明空沢了の手を歴て、栄正寺休是によって手写されたと記された休是本である。又龍谷大学蔵本の一本は、同じくその奥書から、大谷大学蔵本と同じような経路を辿った元禄十三年洛北十念寺十八世明空沢了書写本を、大正六年（一九一七）三月八日山上正尊氏が書写したものであることが知れる。更に東京大学史料編纂所本は、大谷大学蔵本の影写本である。

この系譜は、（一）『吉水法流記』を土台にして作成されたことがみられ、『吉水法流記』の六流に加え、大谷門徒親鸞・嵯峨門徒湛空・紫野門徒源智の三門徒を記し、静見は西山派の東山義と深草義両系に属して、西山派を中心とするが、法然の門下を年臘順に従って記述して、客観的姿勢がみえる。

（三）『浄土惣系図』（西谷本）

○編者 融舜

○成立 永正三年（一五〇六）

○原本 栃木円通寺蔵

○写 本 東京大学史料編纂所蔵影写本（大正九年）、河住玄『浄土宗古系譜』第一冊（謄写版）（一九七三）

○活字本 『法然教団系譜選』（二〇〇四・九）

※ 融舜は西山派西谷義の僧で、西谷義を主とする西山派中心に排列した系譜であるが、この系譜の成立は『吉水法流記』の永和元年（一三七五）、『法水分流記』の永和四年（一三七八）に続くもので、先の両系譜が初めて書写された永正七年（一五一〇）に先立つこと四年前の、永正三年（一五〇六）に成立した古系譜として貴重なものである。

（四）『蓮門宗派』

○編 者 不明

○成 立 前半は天文十七年（一五四八）十一月下旬以前、全体の成立はそれ以降

○写 本 大谷大学蔵本、龍谷大学蔵本、東京大学蔵本、佛教大学蔵本

○活字本 『法然教団系譜選』（二〇〇四・九）

※ 写本の 大谷大学蔵本と龍谷大学蔵本は、表紙或いは扉に「釈間空子」とあり、また末尾に「善龍寺」（大谷大学蔵本の初めには「江州金森善立寺」なる印が捺されている）と記されていることなど、体裁、内容共に全く同一のものと同められるが、東京大学蔵本にはこれらがなく、末尾に「右蓮門宗派 東京市小石川区久堅町 藤原猶雪所蔵 昭和三年六月写了」とあり、藤原猶雪氏所蔵本の書写本であることがわかる。

本系譜は全体が第一図と第二図に分かれ、その間に「西山三鈔寺伝持次第」・「二尊院住持次第」が挟まれている、第二図の後には「浄土先達」・「浄土宗派略図」が付属する。この第一図は（三）『浄土惣系図』（西谷本）と

同内容のものであり、この末尾に「天文拾七年戊申十一月下旬写之畢、」と記されており、第一図の成立が少なくともこの天文十七年（一五四八）より以前であることがわかるが、第二図を含む全体の成立はそれ以降となる。いづれにしても、この『蓮門宗派』は、西山西谷義中心の第一図と鎮西白旗派中心の第二図が組み合わされた系譜である。

（五）『宗派流伝』

○編 者 空誉玉泉（昶誉患徹 修正書写）

○成 立 永禄四年九月二十七日以前（永禄三年とも）

○写 本 伊藤祐晃氏藏（細川行信「源空門下の分流―その系譜資料について―」『印度学仏教学研究』十一ノ一（一九六三・一）による。）

※ 前掲細川論文によれば、伊藤祐晃氏の所蔵される「貞享二丑年正月十八日」の奥書のある一本によるとして、
 「その序の部分に于時如来滅後二千五百有十年永禄四年辛卯九月廿七日書功畢 仏祖伝灯一九世沙門 宙蓮社昶
常福二ハ次ニアリ
 誉患徹謹誌之」とあり、又、その最後には左ノ系図者 常福二ハ三トアリ 常陸国瓜連郷草地山常福寺八世空誉玉泉上人自筆過去帳
常福二ハ庚申トアリ
 裏と誌されており、空誉玉泉（源蓮社、天正十六・二・十七寂）が『過去帳』の裏に書いたものを弟子昶誉患徹
 （玉泉の弟子であること『浄土伝灯総系譜』による）が修正書写したものである事が知られる。」とある。しかし同
 本自体の現存は不明である。ところが（六）『浄土源流（章）図』の第二図・第四図に「宗派流伝」とされる図
 があり、細川氏論文に述べられていることと同様の記載がみられ、『浄土源流（章）図』の一部に『宗派流伝』
 が収録されていることが知られる。

(六) 『浄土源流(章) 図』

○編者 不詳

○成立 不詳

○写本 大谷大学蔵本、大正大学蔵本(不明)、東京大学史料編纂所蔵本、龍谷大学蔵本

※ 本系譜の写本は、大谷大学蔵本の奥書によれば、宗教大学(後の大正大学)蔵本(不明)を山上正尊氏が謄写し、大正四年十二月大谷大学が書写したものである。龍谷大学蔵本は、その奥書からこの大谷大学蔵本を転写したものであることが知られ、東大史料編纂所蔵本は山上正尊氏謄写本を書写したものである。従って原本は宗教大学蔵本にまで遡れるが、現存は明らかでない。この系譜の構成は大谷大学蔵本の山上正尊氏の奥書にもみられる様に、(四)『蓮門宗派』・(五)『宗派流伝』などの数種の系図を順序不同に混交収録したものである。したがって(三)『浄土惣系図』(西谷本)も踏襲されている。

(七) 『浄土系譜』(仮名)

○編者 不詳

○成立 不詳

○写本 奈良念仏寺蔵(不明)

○活字本 鵜飼光順「奈良念仏寺蔵浄土系譜考―東暉上人小伝―」『摩訶衍』一九(一九三九・七)に付録として全文翻刻掲載

※ 本系譜は昭和十四年に鵜飼光順氏によって発表された「奈良念仏寺蔵浄土系譜考―東暉上人小伝―」『摩訶衍』

一九に付録として全文掲載されたもので、現在の伝存はこれのみで、奈良念仏寺蔵の写本について現存は詳らかでない。先の論文によれば、「奈良念仏寺蔵『浄土系譜』（仮名）は幅三五・五cm、全長四八〇cmの卷子本、紙質書体より徳川初期のもの、宗祖以下法蓮、聖光、隆寛、幸西、善惠等法孫弟の略系を列記し、特に鎮西聖光のもと然阿良忠、寂恵、定恵、聖満、了恵等と次第し、且各々簡単なる小伝を付加し、最後に他の「諸系譜」に見らるゝが如く、浄土先達として顕真、明遍、覚諭、明禅、静遍、良遍等を連ね、各宗名匠が宗祖に帰仰せし状を明示してゐる」とある、そして、奈良念仏寺蔵本は、名越派袋中の弟子である東暉（天正二（一五八三）—天和九（一六三三））の書写とされ、『蓮門宗派』（第二図）・嵯峨正定院蔵『白旗総系図』・『浄土源流（章）図』所収第四図の師図と形式内容に於いて一致すると述べられていて、鎮西系を中心にして白旗派に名越派を加えた系譜である。

（八）『浄土血脈論』

○編者 袋中良定

○成立 元和九年（一六二三）十二月二日

○版本 大正大学蔵本（慶安二年（一六四九）版）、東京大学史料編纂所蔵本（承応三年（一六五四）版）

○活字本 『続浄土宗全書』一七巻、『大日本仏教全書』一〇七巻

※ ここで挙げた版本の、大正大学蔵本、並びに東京大学史料編纂所蔵本の二本は若干の訓点を除いて、体裁・内容等全く一致する。前者にはないが後者には吉田庄左衛門なる者の版印がある。そして両本共に詳細な奥書があり、名越派の袋中良定が天正十一年（一五八三）より起草し、元和九年（一六二三）十二月二日、奈良眉目山に

において完成させていることがわかる。更に、鎮西流の系譜に西山派のものをよく対校していたことも窺われる。また、(一一)『浄土惣系図』(名越本)への影響がみられる。

(九)『浄土宗派承継譜』

○編者 貞準

○成立 貞享元年(一六八四)七月十五日、貞享二年初版刊行

○写本 龍谷大学蔵本、大谷大学蔵本(天保十一年写「浄土西山派秘要蔵」四)、東京大学史料編纂所蔵本

○版本 大谷大学蔵本(貞享二年(一六八五)版)

※ 本系譜はその序に、貞準が貞享元年(一六八四)七月十五日の成立を明示している。そして大谷大学蔵本の版本によれば、昌堂・看瑞・慈空・古白の跋があり、古白の跋により貞享二年(一六八五)正月廿日の刊行であることが知れる。龍谷大学蔵本の写本は、その奥書によれば、石黒観道氏所蔵の版本を明治四十四年九月五日光徳寺靈真が書写し、大正五年山上正尊氏、大正七年岩本海量氏が順に転写したものである。つまり、本系譜においては貞享二年刊の版本を原本とみなしても差支えない。

そしてこの系譜は、禅林寺貞準(西谷義)が(三)『浄土惣系図』(西谷本)〔蓮門宗派〕の部分を含む)や(八)『浄土血脈論』などの系譜を踏襲した西山派西谷義系の系譜である。

(一〇)『白旗総系図』

○編者 不詳

○成立 元禄四年七月十八日以前

※ 本系譜は、名称の示すように鎮西白旗系の系譜とされるが、鵜飼光順「奈良念仏寺藏浄土系譜考—東暉上人小伝—」（『摩訶衍』一九所収）によれば、嵯峨正定院藏となつてゐる。しかし現時の伝存は不明で詳細は明らかでない。しかし、同論文によれば、これには「元禄四辛未年七月十八日、今書写三縁会下湛誉了鑑」と記した奥書があると記されていて、その成立は、増上寺にいた湛誉了鑑によつて書写された、元禄四年（二六九二）以前であることが指摘されている。

（一一）『浄土惣系図』（名越本）

○編者 不詳

○成立 元禄十一年（二六九八）以前

○写本 栃木県円通寺藏、河住玄『浄土宗古系譜』第一冊（謄写版）（一九七三）

○活字本 『法然教団系譜選』（二〇〇四・九）

※ 名越僧とみられる良因によつて元禄十一年七月晦日に書写され、栃木県円通寺に伝わるもので、同じく栃木県円通寺に伝来の（三）『浄土惣系図』（西谷本）を基盤にして、鎮西名越派の系譜を入れ込んで全体を整えたものの、この元禄十一年（二六九八）の良因の写本は（三）『浄土惣系図』（西谷本）と同じく浄土惣系図と称するものの、永正三年（一五〇六）の（三）『浄土惣系図』（西谷本）とは体裁等もはなはだ異なつていて、その（三）『浄土惣系図』（西谷本）の方は、作者融舜が西山派の僧であることに起因すると思われるが、法然の弟子第一に西山証空を置く、西山派西谷義を中心とした系図である。それに対し、本系譜はむしろそれを鎮西名越派中心にした系

図であることがみえる。

(二二)『浄土源流解蒙』

○編者 懷山述(懷誉靈山補記)

○成立 宝永五年(一七〇八)

○写本 大正大学蔵本三冊(甲)享保二十年(一七三五)深蓮社寂誉写、(乙)嘉永二年(一八四九)沙門諦真誉写、(丙)書写年不詳

※ 本系譜は、(二四)『浄統略讃』によれば元禄九年(一六九六)懷山(伊勢天然寺)が、増上寺学寮修学の弟子懷誉のために書き送ったものが原本で、『浄統略讃』では本書の成立を宝永二年(一七〇五)としているが、写本の(乙)・(丙)の奥書によると宝永五年(一七〇八)となっている。そして『浄統略讃』の題辞で懷誉は、懷山の述作に「略伝……云云」と補註して『浄土源流解蒙』と名付けたと述べているが、大正大学蔵本の写本では三本とも「略伝」以下の文章は見られず、懷誉補記以前の懷山述作のものとも考えられる。そして、(乙)には「懷山集記」とあり、(甲)・(丙)には「靈山集記」と記している。この『浄土源流解蒙』はさらに享保十九年(一七三四)に修訂補注され「浄統略讃」と改題された。従って内容は『浄統略讃』とほぼ同様に、志那伝灯以下の四篇と附録からなっていて、系譜部分はわずかである。

(二三)『浄土伝燈総系譜』

○編者 鸞宿編(懷山の草稿カ)

○成立 享保十二年（一七二七）六月十五日

○版本 大正大学蔵本（『浄土伝燈総系譜』再興）、他版本多数、『校注浄土伝燈総系譜』上・中・下（望月信亨注、明治三十七～三十九年）

○活字本 『浄土宗全書』一九卷

※ 本系譜は、享保十二年（一七二七）六月十五日の鸞宿の作成の序があるが、早くから『檀林瓜連常福寺志』の記載から懷山の草稿ではないかということが指摘されている。いずれにしても諸系譜の中で一番版本の伝存が豊富である。さらに『浄土宗全書』の底本は明らかではないが、『校注浄土伝燈総系譜』と同一であることが認められる。そして、（三）『浄土惣系図』（西谷本）・（四）『蓮門宗派』（第一図）・（五）『宗派流伝』・（八）『浄土血脈論』・（九）『浄土宗派承継譜』などを江戸中期に集大成した鎮西白旗系であり、聖聡・聖岡・存応に帰結することを示している系譜である。

（一四）『浄統略讃』

○編者 懷山述 懷誉靈山修訂補註

○成立 享保十九年（一七三四）

○写本 静嘉堂文庫蔵本（文化三年（一八〇六）亮海写）、龍谷大学蔵本（文化九年（一八一二）闡道写）、大谷大学蔵本（天保四年（一八三三）隣誉宝岩写）、大正大学蔵本（四冊）、東洋大学蔵本（哲学堂）、東京大学蔵本

○活字本 『統浄土宗全書』一七卷、『大日本仏教全書』一〇七卷

※ 題辞によると、懷山が元禄九年（一六九六）に述作したものを、弟子の懷誉が宝永二年（一七〇五）（十二

『浄土源流解蒙』写本の(乙)・(丙)の奥書によると宝永五年(二七〇八)となっている。)に補註を加えて『浄土源流解蒙』と題し、さらに享保十九年(一七三四)に修訂して『浄統略讃』と改めたことである。本書は志那伝灯・本朝写瓶・諸記指南・浄家紀原の四篇と附録・追加から構成されている。しかし、写本九冊の中、大正大学蔵本の一本は省略の個所が多く、東洋大学蔵本は附録以下の部分を略し、東京大学蔵本は途中で書写を終えている。そして、内容は『浄土源流解蒙』に増補している部分があるが、浄土宗便覧的な記載が多く系譜部分はわずかである。

(二五)『浄土真宗鎮西正統略系譜』

○編者 宣法

○成立 文化八年(一八一二)～文政七年(二八二四)

○写本 大谷大学蔵本、龍谷大学蔵本(大正八年(二九一九)山上正尊写)、大正大学蔵本

※ 写本にあげられる龍谷大学蔵本には、山上正尊氏の附記があり、原本とした大谷大学蔵本は作者宣法の自筆本と推察されているが、現蔵の大谷大学蔵本は龍谷大学蔵本の原本ではなく、その写本と思われる。

本系譜の冒頭に「浄土トハ聖道ヲ簡異シ、真宗トハ実教ノ旨ヲ顯スナリ、鎮西トハ余ノ三流ニ簡別シ、正統トハ白旗ノ嫡流タルコトヲ明シ、略系譜トハ此書ハ伝灯総系譜ノ文ヲ拠トス、而ニ此書タルや要ヲ取テ略スレハナリ」とその書名の由縁が記されている。本系譜は問答形式によって、法然より存心に至る鎮西流白旗派の列祖の経歴等を記し附録として法然・聖光の写瓶相承を述べ、さらに親鸞の正宗を破し浄土真宗の意義を明示している。つまり本系譜は明らかに、安永・天明・寛政年間(二七七二～一八〇〇)に起きた本願寺との宗名争いのために、

鎮西白旗派の正当性を主張した系譜であることがわかる。

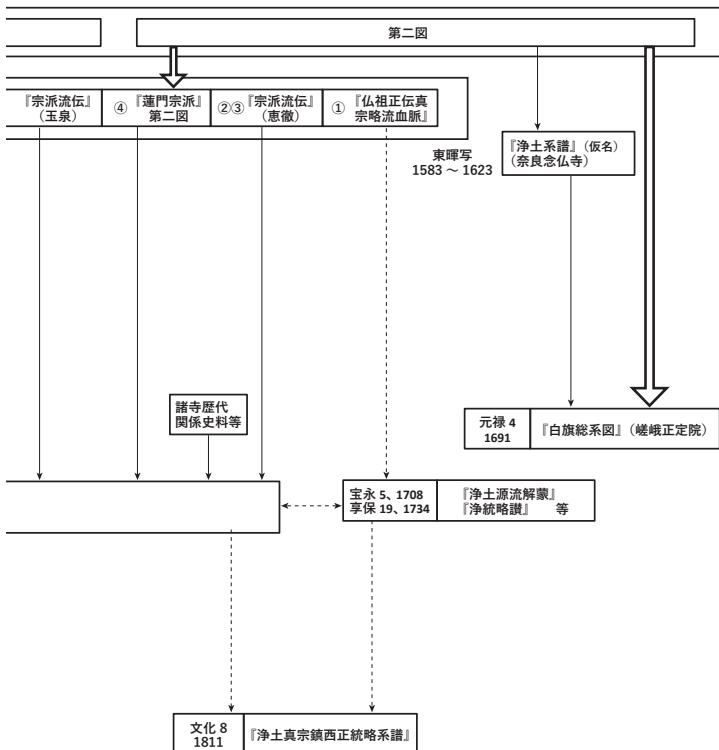
以上のように、成立のより古いと思われる系譜から順に略述してきたが、この諸系譜の編者や書写者をみると、大きく鎮西派の白旗系・名越系、西山派の深草系・西谷系に分類することができる。即ち鎮西の白旗系では、(五)の空蒼玉泉、(一〇)の湛蒼了鑑、(一二)の懷山、(二三)の鸞宿、(二四)の懷蒼靈山、(二五)の宣法であり、名越系では、(七)の東暉、(八)の袋中良定、(一一)の良因である。そして西山の深草系では、(二)の堯恵、(二二)の静見であり、西谷系は(三)の融舜、(九)の貞準である。それらには即ち、深草派が先行し、西谷派と名越派が結びつき、それに白旗派が加わり、徐々に四者の系譜が合流していった流れがある。こうした編者達を含め、諸系譜間の関連性を図式化してみたのが、表「法然教団の系譜の脈流」である。

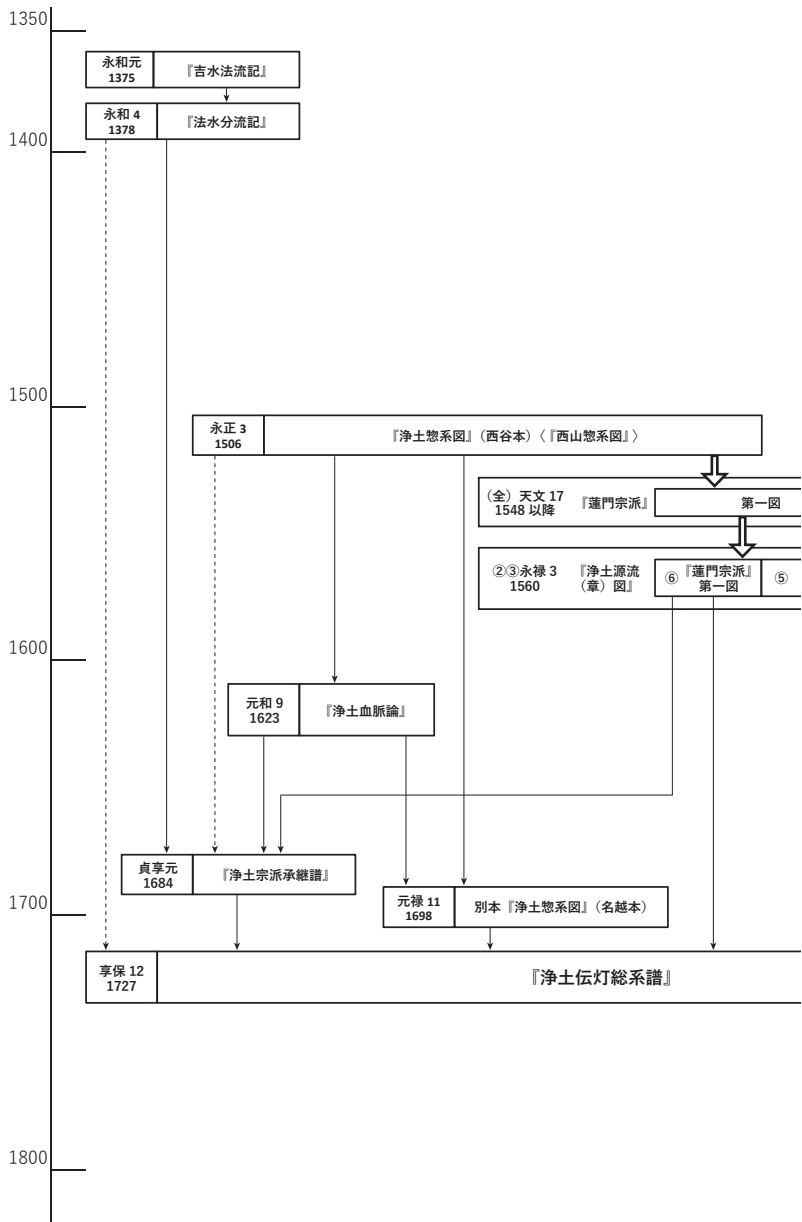
この表を見ても解るように、諸系譜の中で一番早い成立のものは、西山派の堯恵(深草義)の『吉水法流記』(一三七五)となる、しかしそれを基盤とした静見(深草・東山両義)の『法水分流記』が、三年後の永和四年(一三七八)に法然の直弟子を年臘順に配列するなど、より客観的に編纂されている。そして時代は下がるが、貞享元年(二六八四)の西山派西谷義の貞準が編んだ『浄土宗派承継譜』が、袋中の『浄土血脈論』を取り込みながら、この『法水分流記』を参考にしていたことがみられる。

一方、名越の円通寺に蔵される『浄土惣系図』(西谷本)は、永正三年(一五〇六)成立の西山派西谷義を第一とする西山系図であるが、これが『蓮門宗派』第一図に引き継がれ、さらに西山三鈔寺伝持次第や二尊院住持次第などを含めて、『浄土源流(章)図』の第六図に収録されている流れがある。また『浄土惣系図』(西谷本)が、袋中によって『浄土血脈論』として鎮西の白旗・名越色を添加されながら作成されていた。また『蓮門宗派』の第二

「法然教団の系譜の脈流」

- ↓ 同内容のもの
 ↓ 影響が考えられるもの
 ↓ 共通性が見られるもの





図は、その成立が詳らかでないが、『浄土源流(章) 図』第四図や奈良念仏寺蔵『浄土系譜』(仮名、そして正定院『白旗総系図』などとはほぼ一致する記載をもつ。即ち『浄土源流(章) 図』第四図は、『蓮門宗派』第二図を受けていると考えられ、『浄土系譜』(仮名) も同じく「蓮門宗派」第二図に、東暉によるものとみられる名越の記載を加えたものになっている。

『浄土惣系図』(西谷本)・(名越本)を現蔵している円通寺は、もともと名越派の四箇本山の一つであるが、『浄土惣系図』(西谷本)から『浄土血脈論』を作成したのは名越派袋中であり、また『浄土系譜』(仮名)を残したのも袋中の弟子東暉である。こうしてみると、西山系の系図といいながらも、それを鎮西の白旗・名越と融合させていった過程に、名越派の活躍が見のがせない。そうしたものに、白旗派の聖岡の弟子玉泉らによる『宗派流伝』や『蓮門宗派』が合わされ、『浄土源流(章) 図』を作り上げている。ここにはさらに西山派、鎮西の名越派・白旗派の系譜の統合というものが試みられている。

『浄土伝燈総系譜』は、前出の西山・名越両系を中心とする諸系譜の影響を受けて、江戸中期に編纂されるが、総体的には『浄土惣系図』(名越本)によるところが大きい。それに加えて、西山流の系譜では、『浄土宗派承継譜』、白旗派の系譜では、『宗派流伝』との関連が密接であることが認められている。なお、『浄土伝燈総系譜』は、自派の鎮西白旗一流のみを増補するだけでなく、法然門下の他系統の記載をも補足しており、浄土宗系譜の集大成をめざしている感がある。しかし、究極的には、江戸時代において、法然から聖光、良忠、そして聖岡、聖聡を経て存応に至る鎮西白旗一流の正統を明示し、それを高揚することが『浄土伝燈総系譜』の目指すところの主旨であった。

参考文献

- 山上正尊「浄土系譜に顕われたる親鸞聖人」(『仏教研究』四—一大谷大学仏教研究会(一九二三・三))
- 鵜飼光順「奈良念仏寺藏浄土系譜考—東暉上人小傳—」(『摩訶衍』一九仏教専門学校出版部(一九三九・七))
- 細川行信「源空門下の分流—その系譜資料について—」(『印度学仏教学研究』一一—日本印度学仏教学会(一九六三・一一))
- 野村恒道・福田行慈・中野正明「日本浄土教諸系譜について」(『仏教論叢』二六浄土宗(一九八二・九))
- 牧哲義「堯惠勸録『吉水法流記』について」(『印度学仏教学研究』三二—日本印度学仏教学会(一九八四・三))
- 中野正明「『法水分流記』における若干の問題点」(『印度学仏教学研究』三三—日本印度学仏教学会(一九八四・一一))
- 野村恒道・福田行慈・中野正明「日本浄土教諸系譜の研究—法然門下系譜の脈流考—」(『仏教文化研究』三〇浄土宗教学院(一九八五・三))
- 牧哲義「『法水分流記』に於ける西山義の記述について」(『印度学仏教学研究』三四—日本印度学仏教学会(一九八六・三))
- 牧哲義「法然門下の相承について(一)—『吉水法流記』付録の血脈相承の考察—」(『印度学仏教学研究』三八—日本印度学仏教学会(一九九〇・三))
- 牧哲義「法然門下の相承について(二)—聖問と堯惠—」(『印度学仏教学研究』四一—日本印度学仏教学会(一九九二・一二))
- 牧哲義「『吉水法流記』『法水分流記』の翻刻とその研究」(『東洋学研究』三〇東洋学研究所(一九九三・三))
- 牧哲義「法然門下の初期の系譜資料—『吉水法流記』と『法水分流記』について—」(『東洋学研究』三一東洋学研究所(一九九四・三))
- 牧哲義「法然教団周辺の人々—『法水分流記』成立の背景をたずねて—」(『東洋学研究』三四東洋学研究所(一九九

七・三二)

野村恒道・福田行慈『法然教団系譜選』青史出版（二〇〇四・九）

キーワード 法然教団、法然門下、系譜、系図、鎮西白旗